

不意に胸を揉んでもシ
リアス顔すれば深読み
されて許される説

バリ茶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

性欲が限界突破寸前なので、この説を検証してみようと思う。

8 話
7 話
6 話
5 話
4 話
3 話
2 話
1 話

--	--	--	--	--	--	--	--

96 87 73 57 48 34 23 1

目次

1 話

「——なあ翔太郎。ちよつと話がある」

はるか彼方まで蒼穹が広がる、よく晴れたある日のこと。

緑の草花が生い茂る広大な平原にて、春の到来を感じさせる、暖かなそよ風を全身で感じながら、俺はとある男に声をかけた。

目の間には、荒削りの無骨な墓石。

その上に腰かける、銀髪の青年。

今年で齡二十一を迎えるこの俺と、同年代とは思えないような、幼さを残した童顔の彼は、首をかしげて疑問を口にする。

「何だの間宮、藪から棒に」

その青年——翔太郎の前に座り込み、腕を組んだ。

神妙な面持ちの俺の前に、翔太郎も緊張したのか、ごくりと音を鳴らして唾を飲む。

続けて、俺はこう言った。

「——性欲が、抑えられない」

一世一代の告白。

人生を左右する懊悩を打ち明けた末に、翔太郎もまた、返事を告げてくれた。

とても落ち着いた、聞き慣れた、包み込むような優しさのこもった、慈愛の声音で。
何言つてんだおまえ、と——

……

……

「言葉の通りだ、翔太郎」

「待ってくれ、間宮。どうか日本語でお願いできるかい」

魔王軍を率いる四天王という、一筋縄ではいかない強敵たちとの決戦を翌週に控え、とてもよく晴れたある日。

俺こと間宮大我は、大樹の根本に墓石が一つだけポツンと置かれた、だだっ広い平原で、大学の同級生である一人の男に相談を持ち掛けていた。

男の名は滝川翔太郎。

同い年で成人済みのくせに、持ち前の低身長と童顔で女子たちから可愛がられたり、一部の男子から性的な目を向けられているもの、あまり三次元には興味を示さず女装が趣味のエロゲオタクという、この世の終わりみたいな生物である。

「真剣な悩みとして、性欲が抑えられないと言っている。つまりこの真剣な悩みとは、真剣な悩みということなんだ」

「さつきより言葉の組み立てが下手になってるよ。水でも飲んで一回落ち着いて」
言われるがまま、懐から竹製の水筒を取り出し、ぬるい水で喉を潤す。

確かに、少々焦っていたかもしれない。

水を飲んだだけが、意外と落ち着いた。

「ふう。ありがとな、相棒。おかげで冷静さを取り戻すことが出来たぜ」

「そりやよかった。……じゃあ、改めて相談とやらの内容、聞かせてもらおうか」

「ああ、アタマからケツまで詳しく話す。まず、俺はパーティメンバーのおっぱいが揉みたいんだが——」

「待て待て待て」

なんだ、出鼻をくじきやがって。

今まさに打ち明ける寸前だったろうが。

「アタマがおかしかったよ、いま」

「なっ！ てめ、急に悪口を！」

「いや、きみの頭じゃなくて……ダブルミーニングになってるな。ていうか、間宮も大概おかしかったわ」

「オイやっぱり悪口じゃねえか！ 謝れッ!!」

飄々とした態度の翔太郎にイラついたが、怒っては話にならないと自分に言い聞かせ、深呼吸をすることで平静を取り戻した。

そうだ、俺の悩みを打ち明けられる相手は、現状コイツしかいないのだ。

言い争いで貴重な時間を浪費している場合ではない。今は一刻を争う事態なのだから。

「……で、結局なんなの。魔物との戦いに明け暮れる毎日で、ついに精神が崩壊しちゃった？」

「いいから聞いてくれ。——まずこの際だから、一度俺の歩んできた道を、振り返ってみたほうが早いな」

過去を、思い起こす。

翔太郎が『エロゲのヒロインが白ワンピースを着て笑顔で手を振ってるパッケージの背景に丁度よさそうな場所だね、ここ』と、意味不明な戯れ言で評価されたこの緑々し

い平原に訪れるまでの経緯を、今一度想起してみることにした。

俺たち二人は、いわゆる異世界転移というものに巻き込まれただけの、本来であればどこにでもいる普通の大学生だ。

いつものように友人たちと酒を呷り、フラフラになりながら翔太郎と肩を組んで帰路を進んでいると、いつの間にかこの世界へ召喚されていた。ほぼ酩酊状態だったので、着いた瞬間のことはあまり覚えていない。

たどり着いた場所は別々だった。

俺は聖導国家エドアールの手先こと、勇者に。

そして翔太郎は、魔王が統括する魔王国軍の駒である、黒騎士とやらの称号を与えられ———というか強引に押し付けられて、あれよあれよとこの世界の諍いに巻き込まれ、現在に至るといわけだ。

つまり。

俺たちは、異世界の人間は強い能力に適合しやすいか、国民がきみを待つていたかどうか、滔々と詭弁を弄するアホみたいな連中に、拉致されてしまったのである。

王の紋章という、教会の最高指導者である神祇官や、無数の魔物の頂点に君臨する魔王には逆らえなくなる刻印を二人して打ち込まれ、協力者という建前のもと半ば奴隷のような形で、この世界で戦うこととなった。

……といった、よくある血生臭いファンタジーな話は、一旦置いて。

勇者とやらになった俺は、とある部隊に配属されることになった。

そのパーティは魔王軍の四天王や、各地の将校といったえらくい連中を強襲して、軍を内側から破壊するために作られた、通称『勇者パーティ』と呼ばれるもので。

そこにいたパーティメンバーが、俺の悩みの種であった。

——デカイのだ。

どいつもこいつも、乳がデカイ。

そんななんぶら下げて戦えるわけなくね？ とつい悪態が口から漏れてしまうような、ハリのいい巨峰を携えた少女たちが、俺の戦場での仲間だった。

パーティ構成は、よくあるファンタジーなRPG作品のチームそのものだ。

騎士、魔法使い、聖女だか僧侶だかシスターだか名称忘れたけどそれと、勇者の俺で四人のパーティ。

うち三人は女子で、その誰も彼も見目麗しい顔面と、グラビアアイドルが鼻水垂らして泣き散らしそうなワガママボディをお持ちという、とんでもないハーレムパーティだ。

魔法使いのエレナ。女子高生くらい年齢に見えるものの、大賢者の弟子という才女にして、ツンデレの基本を押さえたすぐ赤面するチョコ少女。

聖騎士のシャルティア。規律を重んじる性格だが、決して無辜の民を見捨てることはせず、いかなる状況においても人命救助を優先する生真面目おっぱい。

聖女？僧侶？とか名称はよくわからんが教会のシスターっぽい見た目のアイリス。エレナよりちよつと年下程度で、一言で言うとおまえそんなスケベボディでよく聖職者を名乗れたなど感心してしまうような、ロリ巨乳。

以上が俺のパーティーだ。

異常な俺のパーティーである。

「……………つまり？」

要領を得ない様子の翔太郎。

つまりだな。

「あんな連中と四六時中一緒に冒険してたら、性欲が抑えられなくなるのも当然だと思わないか」

一にも二にもおっぱいおっぱい。

歩けば揺れる。寝てても揺れる。

あんなクソデカおっぱいに、サイズ外ゆえにギチギチいじめられる衣服たちのこと、少しは考えてあげてほしい。ついでにギチギチな俺のズボンのことも気にしてほしい

い。

ドスケベの塊なのだ、奴らは。

「それこそ、お前の好きな抜きゲーから出てきたようなヒロインたちだぞ？」

「エロゲと抜きゲーを一緒にするな。梨とリンゴくらい違うんだぞ」

「ごめん……」

あんま変わらんかね？

どっちも甘くて美味しいし、どっちもおっぱいクソデカじゃん。怖いから言わないけど。

「……あー、要するにあのパーティーで冒険するのが苦痛になってるってことでしょ」

いろいろ要約すると確かにそういうことだ。

「ああいう女の子たちに囲まれて性欲が溜まってる、っていうのはわかったけどさ。それなら普通にそういう話を持ち掛ければいいんじゃないの？ あっただって、数々の敵を打倒した強くて頼りになる勇者さまから言われれば、無下にはできないだろう」

「それはできない」

「何でさ」

それは——

「この世界の俺が、無口で硬派なクールキャラだからだ……」

そう言葉にした数秒間、沈黙が流れる。

——そして、翔太郎は疲れたようにため息を吐いた。

「めんどくさ……」

「なっ!」

め、め、面倒くさいだと! ふざけるな!

いったい俺がどんな気持ちで、あんな性欲なさそうなフニヤチン野郎を演じてきたと思ってるんだ。

この世界では、舐められたらすぐ破滅に直結する。

他人から奪い取ることが常識となっている、クソ殺伐とした余裕のない人間で溢れかえったこの世界で、自分の身を守るにはこうするしかなかったのだ。

動揺すれば、隙を突かれる。

穏やかさを見せれば、仲間や村民が人質に取られる。

だからこそ、つけ入るスキがない寡黙な雰囲気を纏い、人質をとつても人質ごと殺してきそうだからそんなのやるだけ無駄だと思わせるような、冷たく硬い鉄の仮面を被り続けたんだ。

いわゆる生存戦略である。他に選択肢など、俺には残されていなかった。なるべく胸を見ないように。

なるべく太ももを観察しないように。

性欲溢れる二十代の感情を殺しに殺して、今があるのだ。

それを面倒くさいと一蹴するとは何事か。

「結局、パーティーの女の子に嫌われたくないだけだろう？ 国のトップと直接繋がりがあある勇者なら、その権限も絶大なんだし、命令すれば立場上位彼女らは従わざるを得ない。そもそも勇者パーティーって名前の部隊なんだから、あの中じやきみが一番偉い人だ」

俺は、首を横に振った。

「無理やりはダメだ。嫌われたくないからだとか、そんな理由ではなくな」

「じゃあどんな理由なんだよ」

そんな分かり切った質問をするとは、やはり愚かな男だ、翔太郎。

「——かわいそうなのは抜けない」

「……………」

「っ？ かわいそうなのは——」

「いや二回も言わなくていいよ！ 聞こえなかったわけじゃないから！ 聞こえなかったことにしたかったけどー！」

何を興奮してるんだ。

落ち着け、どうどう。

「つまり間宮の性癖の話じゃないか……！ シリアス顔してくだらない相談しやがって……」

「別にいいじゃん、いまのおまえ暇人だし」

「好きで暇人やつてるわけじゃねーの！」

荒ぶった様子で、胡坐をかきながらプカプカと宙に浮かぶ翔太郎の姿は、なんとというか半透明だ。

俺の相棒が暇人で、かつ透けて見える身体になっているのには理由がある。

答えは簡単だ。

彼が現在、物理的に死んでいるからである。

「つたく。殺した本人が平然としやがって……」

「しようがねーだろ。魔王への服従を強制するあの刻印、翔太郎の肉体に直接埋め込まれてたんだから。ちゃんと魂だけ排出して幽霊になる術式も事前に教えたろ？」

「分かっても怖かったけどね!? 友人が真顔で殺しにかかってくるのは！」

くそー、このく、と当たらないパンチを繰り返す翔太郎。

無駄なことをしても疲れるだけだというのに。やはり愚かな男だ。

——俺たちの目的は、元の世界への帰還にある。

こんなヒトと魔物が殺し合いを続けるファンタジー世界など、こつちから願ひ下げだったので、こつそり二人で会いながら綿密な計画を企てていたのだ。

作戦は大きく分けて三つだ。

まず、俺と翔太郎に打ち込まれた、服従の刻印を何とかする。

次に、俺たちをこの世界に召喚した術式と、その起動方法を調べる。

最後に、翔太郎を召喚した魔王城か、俺を転送させた聖導国家エドアールの王城に忍び込み、ゲートを起動させて元の世界へ帰る——と、こんな感じだ。

で、いまは作戦の一段階目。

俺の刻印については、もう外す方法を見つけてあるため、怪しまれないよう、聖導国家に反旗を翻す直前までそのままにしておくとして。

教会よりも慎重な魔王は、翔太郎の内側に刻印をブチこんだため、こればかりは彼の肉体を諦めるしか道はなかった。

「大丈夫なのかい、間宮。僕の新しい身体の方は」

「ああ、ホムンクルスだろ？ 一週間後に戦う四天王の一人が持つてる、あのレアアイテムの指輪を奪えば何とかなるさ。俺の聖剣めっちゃ強いからどうせ勝てるし」

翔太郎には新しい肉体を用意して、そこに魂を移して生き返ってもらおう算段になっている。

……ちなみに、俺が使える術式と、四天王の指輪を組み合わせると、不思議なことにロリっ娘の見た目をしたホムンクルスしか錬金できないみたいなのだが、これは直前まで黙っておく。文句言われて他の方法を探せと言われても面倒だから。

相棒にはおとなしくTSしてもらおう。戻った後の生活の面は、責任もって俺が何とかするので。

「……ていうか間宮。きみ、四天王から指輪を奪ったら、ホムンクルス錬金のためにパーティをこっそり抜けて雲隠れするんだらう。しかもこの世界からはいなくなるし、パーティの女の子がかわいそうとか、あんまり気にしなくていいんじゃないの」

「おいクズが過ぎるぞ翔太郎。お前を生き返らせるのやめようか」

「ご、ごめん」

「ハア、萎えた。やめるわ俺」

「ねえーえー！ ごーめーん!!」

まあ、二人で協力しないとほぼ無理ゲーだから、生き返らせないのは嘘だが。

「……結局、間宮はどうしたいのさ」

その質問に対する正確な答えを、俺は持ち合わせていない。

できるのは感情の吐露だけだ。

「おっぱいが、揉みたい」

「やればいいじゃん」

「あの三人に嫌われたくない……」

「じゃあ、どうするの」

「わ、わからない。——分からないんだ！」

地面に拳を叩き落とす。

項垂れて、涙を流して、俺は叫んだ。

「ああああああアッ……!!! 触りたいいいいい……ッ!!!」

帰りたいのは本当だ。

こちらへやってきて数カ月、いやそろそろ半年が経過がしようとしている。

家族も、友人も、大学の授業も、実家の猫も心配だ。本当に、一刻も早く帰りたい。

「でも、でも、あのクソデカおっぱいを揉まずに帰ったら絶対後悔するし、勢いに身を任せ彼女らの気持ちを無視して触り逃げしても、俺の心に後味の良くないものを残す

……っ!!!」

さらにないつそう声を張り上げ、彼に問う。

「どうしたらいいんだ親友ッ!! 教えてくれエッ!!!」

涙ながらに、継るように、俺は幽霊になっておっぱいも触れなくなった哀れな男に、心の内をさらけ出した。

いま、俺の感情をぶつけられるのは彼しかない。

バカな俺では答えを見つけれない。

いつでもSNSでの承認欲求に飢えて女装しまくっていたこの男にしか見えない道もあるはずなのだ。

俺一人では叶わなくとも、二人ならきつと解決の光をもたらすことが出来るんだ。

そうだろう、翔太郎。

そうであってくれ、頼む。

俺にはもう、お前しかないんだ。

「——はあ、まったくしょうがないなヤツだな、間宮は」
「ツ！」

ふと、顔を上げると、そこには不敵な笑みを浮かべる男の顔があった。

俺にはそれが、とてもとても眩く見えた。

「生粋のエロゲマスターである、この僕が教えてあげるよ。殺伐した世界に生きる少女たちのおっぱいを、どうすれば合法的に揉めるかを、ね」

そう。

滝川翔太郎という男は、カスでクズで愚かな変態だが、それでもやはり。「ありがとう……翔太郎」

やはり、俺の親友なのであった――



『――ああああああアアッ、!!!!』

その日、わたしたちは、目を疑うような光景を目の当たりにした。

泣いていた。

彼が。

誰もいない、ただ広いばかりの草原に聳え立つ樹木の根元で、たった一つの墓石の前で――泣いていた。

彼は、勇者だ。

名を、タイガという。

救世主の一人という体でこの世界へ召喚された、異邦より訪れし異世界人だ。

教会に任せ、そのすべてを間近で見えてきたわたしからすれば、突然ここへ呼ばれた彼の心境は、察するにあまりあつた。

だからこそ、勇者を支持する市民と違い彼の事情をすべて知っているからこそ、タイガ様の気持ち思いやることができている。……それはずだった。

辛いだろう。

苦しいだろう。

そして何より、とても悔しいに違いない——と。

だが、結果的に、わたしのそれは、浅はかな思い込みでしかなかつたらしい。

神祇官に王の紋章を与えられ、強制的に勇者となつたタイガ様は、来る日も来る日も魔物との闘いで、心を摩耗していた。

分かつていたのだ。立ち振る舞いから、察していた。元いた世界では、彼は命の奪い合いなどしていなかつたのだと。

状況の飲み込みが早く、一定の冷静さと容赦の無さからして、貴族の出だということは大方向想がついていた。

だが、実際に剣をもって、戦場で意思を持つ相手を殺すというのは、決して上に立つ人間がやることではない。

彼が、やることではない。

そんな状況に放り込まれて、平気でいられるはずがないのだ。

余程強い心の支えでもない限り、踏みしめられた小枝の如く、簡単に折れてしまいうに
違いない。

だからこそ、わたしがその支えになろうと思った。

孤独で冷たい世界に放り込まれた彼の、せめてもの抛り所になってあげようと。

それが無辜の人々を導く、聖職者の使命であるはずだから。

戦いの支援は当たり前だ。

それを怠らないのは前提として、彼を支えるためには戦場以外での場所でのケアだと
考えた。

まず、タイガ様が住むこととなった住居に、よく足を運んだ。

炊事洗濯はもちろんのこと、この世界での常識や歴史、知りたい情報の収集なども
買って出た。

とても無口で、知らない人から見れば無愛想な人に見えるかもしれないけれど、聖剣
に適応したことから分かる通り、彼はとても優しい心の持ち主なのだ。

それを知っていたからこそ、力になってあげたかった。

優しい人は、誰かの分まで痛みを耐える人。

優しい人は、とても傷つきやすい人だから。

湯浴みのお手伝いや、耳のお掃除など、リラックスになると思ってたわしが提案したものは、すべて『氣遣いは不要だ』と一蹴してしまうストイックなお人だけど、彼が自分に厳しい分、わたしは彼にとって負担にならない——癒しを与えられる存在になろうと考えていた。

けど間に合わなかった。

タイガ様は、いま、自身の心を壊している。

『どうしたらいいんだ親友ツ!! 教えてくれエツ!!』

今朝、彼が神妙な面持ちで家を出た。

いやな予感がして、悪いと思いつつも、後を追って後悔した。

——亡き友の墓標の前で、彼は失意の底に沈んでいたのだ。

タイガ様の召喚当初、もう一人召喚するはずだった人間が、術式の妨害で魔王軍側に奪われたことが明らかになっていた。

その瞬間の、彼の『アイツもいるのか』と呟いたときの、安堵の表情は今でも忘れられない。

わたしは現在に至るまで、あれほどタイガ様を安心させられたことがないから。

もう一人の転移者であるその人に、若干のモヤついた感情を抱きはしたものの、わたしの目的は魔王の支配から解放したその転移者と、タイガ様を再会させるというものに決まった。

だが。

結局、わたしには何もできなかった。

導くことが——できなかったのだ。

タイガ様は、ご自身の手でその親友を討たれた。

辺境の山奥で、勇者パーティーの前に立ちふさがった彼——黒騎士の称号を与えられていた“タキガワ”という男を、勇者としてまるで容赦なく討伐した。

あまりにも平然としていた。

遺体を埋めたあと、まるで一仕事終えたときのような、軽いため息すらついていた。

わたしはタイガ様にとって“不要な守るべきもの”で、彼は本当に守るべきだった者をその手にかけてしまったのだ。

壊れて当たり前だ。

心が死んでしまっても、何もおかしなことではない。

親友を手につけて、その後も不自然なほどいつも通りに振る舞う彼に、何も言えなかったのは悪手だった。

——遂に、彼は我慢の限界を迎えた。

「……………わたしの、せいです」

動揺するエレナさんとシャルティア様のそばで、ぼそりと呟く。

自分の罪は、自分が最もよく理解している。

『ありがとう……………シヨウタロウ』

誰もいない虚空に向かって、まるで神に祈りを捧げるかのように跪くタイガ様。彼を、あれ以上放っておいてはいけない。

平然とした顔の奥で、誰よりも悲しみに耐え続けて、まさに薄氷の如く精神が壊れる寸前の彼の支えになれるのは、ずっとそばで戦い続けたわたししかないはずだ。

「ま、待ちなさいってば、アイリス！」

「そうだ、今のタイガにしてやれることは、そつと——」
振り返る。

そうじゃない。

お二人もタイガ様の理解者ではあるが、最も長い付き合いのわたしからすれば、そつとしておくのは得策ではないと分かるのだ。

「ダメです。いま、あのお方には、わたしが。——わたしたちが必要なのです」
意を決し、再び歩みを進める。

もうこれ以上は見過ごせない。

多少無理やりでも、他人が介在しなければ、彼はさらに深淵へと落ちていってしまう。
だから何とかする。

方法は……えつと、まだ、なにも思いついてないけど。

とりあえず、かつて泣いていた幼少期に、孤児院のシスターにやつてもらった方法から試してみよう。

タイガ様を、この胸に抱き留める。

たとえ拒まれても、怒りをぶつけられたとしても、わたしは決して怯まない。
彼の痛みを、悲しみを、一人だけのものにしてはいけないのだ。

2 話

「——タイガ様」

とても、マズい。

何が良くないかというと、時節が良くない。

神がかり的なタイミングの悪さだ。

俺は早朝に一人で、こっそり聖都の宿を出ていった。

今日は誰との約束も無く、勇者パーティーの少女たちにも、休暇ということが好きに過
ごしてもらうことになっていた——はずだった。

「……アイリス」

にもかかわらず、彼女は何故かここに現れた。

勇者パーティーの後方支援担当こと、聖なるクソソデカおっぱいで俺を惑わすロリ巨乳——

——アイリスだ。

俺が神祇官からの命令で、勇者パーティという部隊に所属する前から、何かと聖都での生活をサポートしてくれてた恩人でもある。

だが、それはそれ、これはこれ。

コレはパーティのメンバー全員に言えることだが、彼女らは魔物に対して容赦がなく、討伐の旅に出ると途端に心に遊びがなくなる。

何が言いたいかというと、そんな殺伐とした環境でのみ行動を共にする俺に対しては、勇者パーティの面々は『仕事場における上司』という認識以外、何の感情も持ち合わせていないということなのだ。

ハーレムとは、あくまで男女の比率の話というだけであり、よくわからん神を崇拝し魔物をぶつころころしたい気持ちでいっぱいな彼女たちにとって、俺はただちよつと強いだけの知り合いなのである。

……アイリスに関しては、この世界での生活の面で多少気にかけてくれている、というの分かるが。

それも恐らく教会からの命令だろう。

同じ部隊に所属する異世界人に対して、召喚云々について他より知識がある聖職者が、上から対応を任されるのはごくごく自然な流れだ。

さて、そんな俺の世話を任されてしまった苦労人なロリ巨乳のアイリスだが、彼女が

この場にいるという事実が少々危うい。

「タイガ様っ」

「ま、待て。そこで止まれ、アイリス」

「えっ……」

果たして彼女はどこからどこまで聞いていたのか——それが問題なのである。

本当にヤバイ。

おっぱい揉みたいと喚き散らしていたところを目撃されていたとしたら、下手すればアイリス本人の手で紋章を起動されて抵抗できなくなり、そのまま王城で斬首刑なんて流れも十分あり得る。

……というか、幽霊の翔太郎と話していたことがバレていたとしたら、計画がすべて台無しだ。

仮にすべてを聞かれていたとしたら、教会に仕えるアイリスからすれば、世話してやっていた上司が実は自分を性的な目で見ていて、なおかつ魔王の討伐という大任も放棄して夜逃げしようとしている、という認識になってしまう。いや、事実としてそうなのだが。

どうしたものか。

泣いているところ見られていたとしたら、クールキャラも瓦解してしまうのではない

か。

クソ、もはやこれまでか——

『いいかい、間宮』

ハツとした。

先ほど、翔太郎から貰ったヒントが、脳裏によぎった。

念には念を入れて、彼本人はここから遠ざけて森の方へ逃がしたが、俺の心の中にはアイツの言葉が強く残っていたのだ。

『意味深に振る舞うんだ。まず何よりシリアスな雰囲気で、同情を誘う。これだ。きみが彼女たちのデカすぎるおっぱいを揉むためには、まずここから始めるべきなんだ』

そうだった。

アイツは言っていた。

シリアスな空気感を纏え、と。

ウソも言い訳も見抜かれるのが怖いのなら、その設定の“想像”を相手に任せてしまえばいいのだ。

偽りの真実を語るよりも、相手に強い思い込みをさせる事こそが、この世界における

攻略法だ。

とはいえ、俺たちの会話の全てを聞かれていたとしたら、そこにはゲームオーバーの文字しか残されない。

そこんとこどうなんだい、聖女さん。

「アイリス、何故ここにいる」

「……申し訳ございません。余計な気遣いだとお思いになられるかもしれませんが、タイガ様が心配だったので。聖都の宿より、少し離れて尾行しておりました」

意外なことに、彼女は取り繕うことなく白状した。

さすがは教会の懺悔室を任される地位にある少女といったところか、どうやら嘘でこの場を乗り切るつもりはないらしい。

虚言と虚栄で逃げ道を作ろうとしている俺とは、まるで正反対な光の存在である。まぶしい。

「……情けないところを見られてしまったな。失望しただろう」

「い、いえつ、そんな！ ご友人を亡くされて、平然としていられるはずがありません。あれは、人として当然の——ですから、失望などあり得ません……っ！」

探りを入れるつもりで話してみたが、こちらの予想とは裏腹に、アイリス本人はあまり余裕がなさそうだった。

何を言うかは決まってるないが、とにかく声をかけてみたとか、そんな雰囲気を感じる。

「どこまで聞いていた」

「それは……その。……タキガワ様に、懺悔を」

「……そうか」

はい〜！

終わりました！

翔太郎におっぱい揉みたいようと相談してるとこ、聞かれました！ 死んだ……。

どうすんだこれ。

本当に意味深ムーブだけで乗り切れるのか、この状況。

「理解しただろう、アイリス。俺はそういう人間なんだ。勇者と呼ばれるにふさわしい、高潔な人間ではない。……強い人間では、ないんだ」

シリアスな雰囲気ってこれで合ってる？

もう全部聞かれた以上、なんとか同情してもらってこの場を見逃してもらおうしか方法がないんだが。

きつと走って逃げたら追いかけるので、ゆっつくりと踵を返し、ゆっつくりと歩き出した。

どうだ、俺の背中から『放っておいてくれ』というオーラがにじみ出ているだろう。

シリアスムーブ講座その一。

恥ずかしいところを見られても焦らないこと、だ。これ大事。

徹頭徹尾クールなキャラ、という仮面は剥がれたが、それでも気難しい男だというイメージは崩さないように振る舞おう。

「——まってください、タイガ様ッ！」

ワンチャンここから逃げればリカバリーできなくもないから、見逃してくれ、と。

そう考え、背を向けて離れようとしたその瞬間——彼女が後ろから抱きついてきた。

「ひ、ひとりになっては、いけません」

「……………」

何事。

「……………」

えっ、なにごと？

あの、ちよつといいか。

——背中に、クソデカおっぱいが、当たっている。

「頼りないと、知ったような口をきくなど、そう思われてしまうかもしれません。です

が、どうか。どうか……一人で、抱え込まないでください」

アイリスが何か言っている。

それは分かる。

だが、困ったことに、その何もかもが耳を通り抜けてしまう。

たぶん、テメエ逃がさねえぞとか、このまま教会に連れてって斬首だぜとか、そういう脅しの類だと思われるのだが、俺には何の声も入ってこない。

——お、おっ、おっ。

おっぱいが、柔らかい感触が背中全体に広がっている。

背中全体に感触が広がるって、どんだけデカいんだよその乳。ふざけすぎだろ、おっぱいオバケかよ。

ちよつと待って、本当に集中できない。

俺が逃げようとしたから、教会の人間であるアイリスは立場を優先して俺を拘束した。それはわかる。スゲーよくわかる。

しかし抱き着いて引き留めるとはどういうことだ。

アイリスに限らず、勇者パーティーの面々はみんな拘束魔法が使えるはずだ。

それを使って縛り上げればいいのに——待てよ。

まさか、冥途の土産のつもりなのか？

おっぱいおっぱいうるせエから、死ぬ前にこの感触だけ味わわせてやるよ、ということなのだろうか。

「ですから——わたしを——」

神はここにいたのか。

このロリ巨乳、聖職者の鑑かよ。

慈悲つてのはこういうことを言うんだな。

死ぬ前だろうと何だろうと、半年間も目の前にありながら、視線を外し一ミリも触れなかった憧れのシスターおっぱいを背中全体で堪能させてくれたのであれば、もう未練があっても死んでいい。

「タイガ様。……お願い、申し上げます」

「ああ、そうだな。ありがとう、そうさせてもらおう」

「——ッ！」

とりあえず上辺の返事だけ返し、思考を殺して、ただひたすらに背中の感触に全集中する。

胸の呼吸、乳ノ型、清廉なるロリシスターの聖なるホーリーおっぱい背中味わい——

◇

「……ですから、わたしをお使いくください。どのような要求であっても、喜んでご奉仕させていただけます。だからどうか、どうか——おそばに置いてください。わたしにも背負わせてください、タイガ様。……お願い、申し上げます」

とても身勝手な要求だということは分かっていった。

こんな、分かりやすい引き留め方をしても、首を縦に振ってはくれないのだろうと、最初から理解していた。

それでも言わなければならなかったのだ。

あのとき、黒騎士と相對したとき、私は彼に何も言えなかった。

だからもう、後悔したくない。言葉にするべきことは、伝えられるときに伝えるべきなんだ。

たとえそれが、無謀だと分かっても——

「ああ、そうだな。ありがとう、そうさせてもらおう」

——まさか。

こんな奇跡が、あり得るのだろうか。

どうか必要としてほしいと、身勝手に願った。

そうしたら、必要としてやると、彼はそう言ってくれた。

わたしにとって、こんなに都合のいい、願ってもない展開がこの世にあつていいのだろうか。

「……は、あ。ああ、ああ、ありがとうございます、タイガ様」

幼い頃から教会への従事を強制されていたわたしを、冒険の日々へ連れ出してくれた、恩人にして英雄。

タイガ様が、必要としてくれた。

突き放すように、女性になどまるで興味を示さなかった彼が、わたしのことだけは受け入れてくれた。

ああ、信じられない。

ああ、こんな喜びが、わたしの人生にあつたなんて。

タイガ様、わたしの、勇者様——

3話

「タイガ様、エレナさん、お夕飯ができました」

現在寝泊まりに使用している聖都の宿——その二階の大部屋で、魔法使いのエレナと、次の討伐の旅に向けた荷物の準備をおこなっていると、エプロン姿のアイリスが部屋に入ってきた。

時刻は夕日が沈んだ頃。

今日中に斬首されるのかと身構えていた俺は、これがどうして未だのうのうと息をしていた。

自分の首を触り、まだ胴体と頭が繋がっていることに安心を覚えたのか、不意に顔がほころんでしまう。

そんな俺を見たアイリスもまた、嬉しそうな表情をして、居間のある一階へと降りていった。

数時間前、翔太郎の墓が鎮座している草原に現れたアイリスは、なぜか俺の不審な発

言を教会に告発することはせず、ただ『帰りましょう』の一言しか発さなかった。

その時は彼女の行動の意味を察せなかったが、今ならわかる。

これは、俺の背中に幸福の源を密着させてくれた時と同様、聖職者という立場からなる慈悲に他ならない。

いわゆる最後の晩餐というやつだ。

曲がりなりに半年間、このパーティで冒険をしたのだから、最後に別れの挨拶と食事くらいはさせてやる、ということなだろう。

性的な目を向けられている、と発覚したというのに、それでもこんな行動に出るなんて、あまりにも優しすぎる。あいつ聖母の生まれ変わりか何かなのだろうか。その無駄にデカすぎる乳に詰まっているのは慈愛の心だったんですね。

——さて、頼れる仲間の気遣いによって、なんとか数刻の延命が叶ったわけだが、このチャンスを見逃すわけにはいかない。

背中で幸せいっぱいおっぱいを堪能したときは死んでもいいと考えてしまったものの、助かる可能性が増えたのであれば話は別だ。

俺の目的は変わらず、ホームクルス錬成による翔太郎の蘇生と、元の世界への帰還にある。

同情と憐みで心の救済を図ってくれたロリ巨乳シスターには悪いが、それでハイ罪を

償って死にますと、素直にギロチン台へ身を捧げられるほど、殊勝な感性は持っていないのだ。

しかし夜逃げを企てているとはいえ、それを察知されてはお話にならない。

なので抜け出す逃走経路を頭の中で組み立てつつ、今晚の就寝前までは、敬虔な信徒の如く大人しく死を待つ男として振る舞うことに決めたのがついさっきだ。

「ふっ……最後の晚餐、か」

悟ったようにそう呟いて立ち上がる。

すると、すぐそばにいたエレナが、目を見開いて硬直していることに気がついた。

おそらくアイリスによる情報共有で、俺が現在置かれている状況は把握しているはずであるため、大方俺が無様に抗うとでも考えており、その実態が意外にも殊勝なもので驚いたのだろう。

「……ね、ねえ、勇者」

「どうした、エレナ」

おずおずと、後ろから俺に声をかけてきた。

彼女は俺を名前ではなく勇者と呼ぶ。俺個人になど興味はなく、あくまで勇者という立場だから仲間として振舞っているんだ、という意思表示なのかもしれない。多分この認識は間違っていない。この世界の魔法使いだいたい他人に興味ないやつらだし。

「っ！……いえ、なんでもない。先に行くわね」

俺が返事をするよりも早く、エレナはそそくさと一階へ降りていった。

あの余所余所しい態度も、相手が自分の胸を揉みたがっている変態だと判明したあとなら、当然の反応だ。

むしろ普通に会話しながら荷物の準備を手伝ってくれただけありがたい。

彼女と今生の別れになるのは、やはり寂しさを感じてしまうな。

あのローブの下にあるハリのいい巨峰を揉みしだいてから、ここを去りたかった――

——ん？

いや、待て。

落ち着け。

何か、おかしくないか。

実際にこの目で見たわけではないが、きっとアイリスは他の二人のパーティメンバーにも、俺の処遇については事前に話してあるはずだ。

ヤベーやつなので近日中に処刑しますぜ、と。

だが、それだとこの状況はおかしい。

エレナはどうして——わざわざ俺の分も含めた荷物の準備を、手伝ってくれたのだろ

うか。

殺されてパーティから永久離脱するメンバーの荷物など、バッグのスペースを潰してまで入れる必要はないはずだ。

四天王の一人を討伐しに向かう旅が始まるのは、今日から数えてちようど一週間後。

近いうちに死ぬ仲間の荷物など、今のうちから処分を始めてもおかしくないはずなのだが――

「間宮、おい間宮」

突然、聞き馴染みのある声が、鼓膜に響いた。

聞こえた方向、つまり背後を振り返る。

そこには、やはり見慣れた悪友の姿があつた。

「翔太郎。どうしてここに」

「心配だから様子を見にきたんだ。あと、いろいろと情報を伝えにね」

幽霊である彼と会話しているところを見られるとマズいため、部屋のドアを閉めてから向き直った。

翔太郎の気持ちは嬉しいが、いまは時間がない。

「一階で彼女らが待つてるから、手短に頼む。遅くなったら怪しまれる」

「……少しだけ会話を聞いてたし、パーティメンバーの様子も確認していたから、状況は

分かってる。だからこそ、一つ提案があるんだ」

今の状態で、他に何かできることがあるのだろうか。

「逆転の発想だ。むしろ怪しませよう」

生粋のエロゲハンター、つまり百戦錬磨の恋愛マスターとも言い換えられる立場にある彼からの提案は、まさに目から鱗だった。

「まず前提として、あのアイリスという少女だが、僕らの会話が全て聞こえるような距離にはいなかった。物陰から早歩きで向かってきたから、聞こえたとしても最後のほうだけ……しかも、間宮の声だけだろう」

確かに幽霊である翔太郎の声は、彼が幽霊になった術式の一部を応用した俺にしか聞こえない。

あのドヤ顔で語っていた異世界おっぱい攻略作戦は、俺以外の誰かには絶対に認識されていないということになる。

「恐らく間宮が思っているほど、深刻な事態には陥っていないはずだ。内容が不確かな会話だけで殺されるほど、勇者という立場も弱くはない」

言われて気がついた。

俺、一応は人類側の主戦力じゃん。

服従の紋章も仕込んであるし、そんな簡単に手放しはしないか。

「……だから、おっぱいは揉める」

「ツ!!!」

衝撃で尻もちをついた。

翔太郎のそのセリフが、まるで確信しているかのような、あまりにも自信に満ちたものだったから。

おっぱいが、揉める。

それは本当なのか、友よ。

「ああ、揉める。きみがシリアスに振る舞って、意味深な空気を醸し出せば出すほど、その確率は上昇し続ける。きみたちは仮にも半年間、何度も死線をくぐり抜け、苦楽を共にした仲間なんだろう？ 彼女らの様子を加味しても、間宮への“情”は少なからずあるはずだ」

そうだろうか。

いや、そうかもしれない。

俺の親友は女装写真をSNSにあげて男を引っかけて弄ぶ性悪クソゴミ人間だが、人を見る目は確かなのだ。

「触れてくるに足る大きな理由があつて、それには自分の献身が必要なのだとか、触らせなければきみの身が危ないだとか、そういった思い込みをさせる空気感を出せばそれでいい。罪悪感は何よりも強い武器になる」

「……いいのか。俺はまだ、あの栄光（編）を掴むために、戦つてもいいのか？」

「ああ、いいんだ。……ていうか、寧ろそうしないといけないんだぞ」
な、なにっ。

俺が胸を揉まなければいけない理由だと。

「間宮。きみ、やりたいことを我慢する際の、自分への言い訳は上手なくせに、結局直前になって『やっぱり諦められない』って開き直るタイプだろ」

「ど、どうして急にそんなひどいことを言うんだ」

「いや、だつて前期の試験のとき、勉強がんばる！つて気合い入れてたくせに、前日になって『ノート写させてくれ』つて懇願してきたじゃないか。つまりそういうことだよ」
「……………」

ぐうの音も出なかった。

こまつた、ちよつと勝てない。

「どうせ我慢してても、この世界を脱出する直前になって、やっぱり揉みたいつてワガママ言うに決まつてる。だからきみに必要なのは、この世界における未練を綺麗サツパリ

なくすことなんだ」

「なるほど。——つまり、おっぱいを揉めばいいってことだな？」

「ああ。当初の予定通りに、ね」

「そうか、なるほど。」

目標が明確化されて助かった。俺一人じゃ今夜の逃走ルートを考えるので手一杯だったからな。

「やっぱりお前がいてくれてよかつたぜ、相棒。」

「間宮……彼女らのおっぱいを揉むのに確実な方法はない。だからこそ僕たちで検証しよう」

「もちろんだ。俺たちの手で検証し、証明して見せる。——不意に胸を揉んでもシリアス顔すれば深読みされて許される説をッ！」



彼は、ヒーローだった。

十五歳の頃、生まれ育った故郷を、魔物の軍団に滅ぼされた。

あの日、両親を目の前で殺されたその時から、アタシは復讐の炎でのみ生きていた――否、生き永らえていたのだろう。

名のある大賢者の弟子入りを志願し、死に物狂いで認めさせ、魔法を極めて聖都入りしたあと、アタシは勇者パーティなる部隊に配属された。

近く召喚されるであろう異世界人の勇者を支え、強襲による敵側の主戦力を殲滅することが目的のチームだと聞いたが、別にどうでもよかつた。

故郷を滅ぼした、あの巨大な竜を殺すことができれば、それ以外のことは何でもよかつた。

彼は、寡黙だつた。

聖導国家エドールは、これまで異世界召喚を何度もおこなっていたそうだが、それはいつも無残な結果に終わっていた。

聖剣との適性値が高い年齢の少年少女を召喚しても、勇者の称号を与えられた彼ら彼女らは油断をする。

驕り高ぶり、“ちいと”だなんだとのたまひ、自分は強いと嘯き続ける。

そして、つまらないところで躓き、命を落とす。

なぜか、異世界の人間は、この世界に召喚されただけで、自分はまるで物語の選ばれ

し主人公のような立場だと錯覚し、聖剣の強力な加護に酔ってしまっらしかった。だが、あの青年は違った。

寡黙で、冷静で、現実を見ていた。

それでいて、どうしようもないほどに、アタシにとってのヒーローだったのだ。

他の勇者たちとは違い、彼は、タイガは、真の意味で勇者だった。

どいつもこいつも『復讐は虚しいだけだ』とか『オレが支えになってやる』だとか、唾棄すべき綺麗事やできもしない約束ばかりする中で、彼は何も言わず、ただ行動で示して見せた。

故郷を滅ぼした竜を追い詰め——アタシ自身の手で討伐させてくれた。

フオローしなくてもいい弱い魔物から庇っただけで、気安く撫でようとしてくる一人目の少年とも、ただ自分の力を誇示し続ける三人目の少女とも異なっていた。

ただアタシの目的を理解し、それを支え、恩を着せるようなことも口にせず、淡々と仲間として戦い続けてくれた。

勇者とは、彼のことだ。

勇ましく、優しく、強い者のことだ。

——けれど。

『——ああああああアアッ、
!!!!』

彼も人間だった。

アタシはひどい勘違いをしていた。

物語から出てきた舞台装置ではなく、タイガはタイガというひとりの人間だったのだ。

見知らぬ土地へ召喚され、死地へ赴くことを強制され、何も思わないはずがない。

何も感じないはずがない。

辺境の地で黒騎士を殺したあの日が、きつと決定打だった。

アイリス曰く黒騎士は、彼と同じようにこの世界へ召喚された、かつての親友だった。そうだ。

『どうしたらいいんだ親友ッ!! 教えてくれエツ!!!』

その姿に、強く絶望を感じた。

彼にではなく、自分自身に。

勇者という幻想に、復讐と理想の妄執に囚われ過ぎて、大切な人のことが何も見えていなかった自分に、心底殺意が湧いていた。

『——わたしたちが必要なのです』

アイリスは迷わなかった。

アタシよりも幼いはずの彼女は、迷ったことを後悔して、今度は迷わないようにと、覚

悟を決めていた。

アタシは変わららず、ただ悄然と立ち竦むばかりだった。

許せない。

こんなことではいけない。

きつと、アタシにもできることが、何か――

「ふっ。……最後の晚餐、か」

――ああ、ダメだ。

このままでは、きつと駄目だ。

「……………？ どうした、エレナ」

彼の瞳の奥に、自らの生への諦観が映っている。

親友を手にかけて自分への罪悪感と、勇者という立場そのものの重圧に耐えかねて、何もかもを諦めようとしている。

最後の晚餐だなんて言葉が、無意識に溢れてしまうほどに。

「……………いえ、なんでもない。先に行くわね」

もう迷っている暇はない。

きっとアイリスだけでは足りないのだ。

気持ちの問題ではなく、まず彼自身を物理的に死なせないようにしなければならぬ。
い。

拘束魔法や催眠など、勇者が本気を出せば破れる枷はどれも無意味だ。

「死なせない。……絶対に、死なせたりしないんだから」

階段を下りながら、今度こそ覚悟を決めて前を向いた。

魔法を極めたアタシにしかできないことが、きっとあるはずなのだ。

もう時間がない。急がないと、何もかも終わってしまう。

ほんの少しだけ待っていて——アタシの、勇者。

4話

アイリスやエレナの前でシリアスな雰囲気醸し出した、その翌日。

彼女らへの合法的なセクハラ行為と、並行して行うべき情報収集のため、俺は聖都郊外に位置する、暗い墓地に足を運んでいた。

ちよつとばかり大切な、この世界で生き抜くための情報収集——その名も突撃隣の亡霊さん、である。

平たく言うくと、墓地にいる亡霊たちに死んだ時のことを聞いて、危険な相手や場所を事前に調べておこう、という話だ。

勇者になってからの半年間で判明したことだが、この世界における魔物のほとんどは、どうやら強い弱いに限らず“隠し玉”というものを持っている。

例えば、以前闘ったスライム。

やつは弱そうな見た目と、一見無害そうな立ち振る舞いをする魔物なのだが、その実態は相手が油断した隙をついて、骨まで溶かす強酸性の唾液をぶっかけようとしてくる悪質なクソモンスターだ。ギリギリで躲したが、自分で買ったお気に入りのカッコいい

黒コートはダメにされた。

そう、勇者として前線に立つ以上、少し慎重になり過ぎるくらいがちょうどいいのだ。本当は、血生臭い戦場のことなど、考えるだけで疲れるので、ダラダラとやっていきたいお気持ちなのだが、こればかりは致し方ない。

全てはおっぱいのためである。

「で、この先に亡霊がたくさんいるってこと?」

「まあな。そういえば、翔太郎はここに来るの初めてだったか」

「なんか来る前に『気をつけろよ』って言ってたけど、どういうことなんだい」

「……行けばわかるさ」

いつもの背後霊を引き連れてやってきたのは、辺鄙な場所にある割には手入れが行き届いた、広い墓地だ。

そして、そこでは。

『シューウウウウツ!!』

『ぐわあ!!? ク、クソっ、これで二対一か……ッ!』

『おいキーパー! ちゃんと止めろって!』

——亡霊たちによる、生首をボールにしたサッカーが、繰り広げられていた。

「……なにあれ」

「生首サッカーだけど」

「見りやわかるって。そうじゃなくて、ああなってる理由をだね」

「死んでるしどこにも行けなくて暇だから、サッカーして遊んでる」

「……頭が痛くなってきた」

初めてアレを見るとそうなるよな。

俺も最初は頭を抱えて、墓地への入場を踏みとどまったものだ。

——この地の名は、勇者墓地。

かつて聖導国家エドアールに勇者として召喚され、冒険の中でその命を散らした若者たちが埋葬される、亡霊たちの遊び場である。

……

……

『オメー翔太郎つつうんか！ どう見ても日本人やん！ 遊ぼうぜッ！』

「ちよつ、僕はやらないって——ま、間宮——」

亡霊に引きずられて、強制的に生首サッカーに参加させられた友人を一瞥しつつ、墓石の前に立って手を合わせる。

すると、墓石の後ろから一人の少女が姿を現した。

例によって例の如く、彼女の身体もまた半透明、つまり亡霊である。

『あら。十代目、こんにちはあ』

「お久しぶりです、八代目」

ニコニコしながら俺の隣に座る、ほんわかゴースト。

彼女は歴代で八番目にこの世界へやってきた勇者だ。

つまり俺の先輩にあたる人、ということになる。

「みんなの様子はどうですか」

『相変わらず、かなあ。今日は珍しく動いてるけど、いつもはダラダラしてるだけだし』

少女の見つめる先に視線を移すと、そこでは翔太郎を含めた五対四のサッカーが行われていた。

内一人の少年は首から上が無いため、今日は彼の頭がボールの担当になっているらしい。

ここに居る彼女たちは、幽霊ではなく亡霊だ。

特殊な術式で、魂を綺麗に保存して幽霊になった翔太郎とは異なり、突然の死で魂が欠けている彼ら彼女らは、肉体が安置されているこの墓地から動くことはできない。

ゆえに暇を持て余し、誰か一人の首を選んで球遊びに興じている、というわけだ。

『十代目もいんじゃない！ おーい、早くあの国滅ぼせーっ！』

『よそ見してるのでボール頂くね』

『あつ、てめー！』

彼らは元々一般人だったわけだが、エドアールに選ばれた結果強制召喚され、勇者としてその生涯を終えた。

それに関して、思うところがないわけではないが、それはそれ、これはこれ。

俺には俺のやるべきことがある。

義憤に駆られて、いち国家に反逆できるほど、彼らに対して思い入れがあるわけでもなく、ヒーロー然とした感性を持つてゐるわけでもない。

できる事といえば、聖剣による先輩たちの成仏。

そして元の世界へ帰還する際に、召喚システムを破壊して、以降の勇者を生み出させないようにするくらいがせいぜいである。

この世界の行く末に関しては知らぬ存ぜぬだ。

『今日はパーティーの女の子たちはいないの？』

「墓の掃除に来たわけじゃないんで。あいつら来たら、みんなも隠れないといけないでしよ」

『まあねえ。例え亡霊でも、魂が鎮座してるのバレたら、あの国にまた利用されそうだしなあ』

八代目の少女と、そんな会話を交わしていると、サッカーが休憩時間に入ったのか、六代目の少年がフラフラと此方へやってきた。

『十代目、エレナは？』

「いませんよ。来週の戦いに向けて、聖都でいろいろ調整してます」

『はあー、そうか。また墓の掃除してほしいなあ』

六代目である彼は、まだアイリスとシャルティアが加入する前のパーティーの勇者であつたため、一応古参のエレナとだけは顔見知りだ。

『あの無表情っ娘の頭を、また撫でたい……』

「……？ エレナが無表情、ですか」

六代目とは、そんなに会話をしていなかったため、初耳だ。

あのツンデレの化身みたいに表情豊かなエレナが、無表情っ娘とは、どういうことだろうか。

まるで想像がつかない。

俺はアイリスと、先に二週間ほどチュートリアル的な冒険をしたあとに、勇者パーティを任せられたため、それ以前のエレナのことはよく知らない。

『ふっふっふ、ウケる話しても頷くだけで無口だし、頭を撫でてでも無抵抗で無表情だった筋金入りだ。あの子は感情表現が苦手なだけで、きつとオレのこと好きだったんだろうな……』

「そ、そうすか」

彼女が六代目をどう思っていたのかは不明だが、俺と冒険をしているときのエレナは、表情豊かでよく喋る少女だった。

打ち解けていなかった最初期こそ、お互いロクに喋りもせず距離を測っていたが、最初の冒険で道の通せんぼをしてきたなんかクソデカイドラゴンをぶっ飛ばした頃には、すっかり仲間として受け入れてくれていた。

それを踏まえると、単純に六代目に対する彼女の好感度が低かっただけに思えるのだが——それは果たしてどうだろうか。

もしかしたら、俺の前では頑張って話をしているだけで、本当は感情表現の希薄な少女、という可能性もある。

それはそれで、何というかそそられるものがある。

胸を触られて照れるのも、もちろん良いのだが、無表情で無抵抗なまま気にしないの

も、中々に興奮を煽る反応だ。

気になる……本当はどっちなんだろう……。

『スライムからも庇ったし、確実にオレのことが好きだったはずだ。だって今でもオレの墓を掃除しに来てくれるしな』

『六代目の思い込みがすごいなあ。エレナちゃん、ウチのもやってるんだけど』

「あの、先輩方、そろそろアンタらを倒した四天王の話を教えてほしいんですけど」

雑談にきたわけではないのだ。

こんな薄暗くて不気味な場所はさっさと去るに限る。

『ああ、あの指輪つけてる骸骨みたいなやつだろ。……名前、なんだっけ？』

『ウチも忘れちゃった』

「……はあ、まったくしようがない先輩たちだな。確か……そう、ポコチンですよ」

「間宮ちがう。ロモデイン。ポコチンじゃない」

サッカーから解放された親友を交えつつ、同じ国に生まれ、同じ国で育った同胞たちと、その彼らを葬った怪物をやつつける作戦会議が始まった。

おっぱいは揉む。

四天王も倒す。

両方やらなくてはならないってのが、今代勇者のつらいところだ。

『あいつ、雑魚モンスターに変装して群れに紛れるから、結構厄介なんだよな。死ぬ直前に気づいたから遅かったけど』

『おかげで弱い魔物に殺されたよわよわ勇者として、歴史に名を刻まれるウチらなのであった』

「そういえば、ポコチンの野郎が変装してた姿って、何か共通点とかありました?」

「ロモディンだって」

『ウチの時のポコチンは、スライムとかゴブリンとかだったかなあ』

『あー、オレとやりあった姿は、中サイズのオークだったぜ。たぶん飛行する魔物には変装できないな、ポコチンのやつ』

なるほど、つまり。

「ポコチンにも穴はある……ということですね」

「だからロモディン——」

「さつきからうるせエぞ翔太郎ツ！ ちょっと黙ってる！」

「ええッ!?!」

5 話

『じゃあ質問だけど、十代目はこの世界でやりたい事とかあるの？』

「仲間のおっぱいを揉むことです」

『アハハ、不純〜』

先輩たちからの情報収集をあらかじめ終え、余った時間で雑談をしていた、その時だった。

『お、おーい十代目。なんか、魔物の群れが遠くから、この墓地に向かって進軍してんだけど……』

事態の急変。

この日を一言で表すとすれば、それ以外には思いつかなかった。

聖都近郊に、突如として出現した魔物の群れ——というより、明らかに何者かによって統率された軍団が、警備の薄い居住区を襲撃して略奪行為を始めた、との一報が、遠

隔通話魔法で入ってきた。

墓地へ訪れること以外何も決めていなかったため、今日は自由な休日だワツホイと浮かれていたのだが、そうは問屋が卸さないらしい。

やはり面倒くさい世界だな、とつくづく思う。

神祇官だけじゃなく魔王もキモい。

たまには平和な日常を送ろう、という考えには至らないのだろうか、あの馬鹿共は。

今回の魔王軍側の目的は、聖都近郊を襲うことでエドアール側の戦力をそちらに向けさせ、ひとりぼっちの孤立無援状態となった勇者^{オレ}を、この墓地に埋葬してやろう、ということらしい。

俺が勇者墓地へ赴くことを伝えたのは、仲間の三人だけだ。

普通に考えれば、俺がここにいることなど、魔王軍側は知る由もないはずなのだが――そこら辺は一旦置いて。

墓地に現れたのは、不自然なほどに下級モンスターだけで構成された、弱々しい魔物の群れであった。

まともには戦えば負けるはずのない相手だが、幸いにもついさつき雑魚モンスターに変装する四天王がいる、という話をしたばかりだ。

どう考えてもアイツがいると、その場にいる全員が空気で察した。

「フハハハ！ 人類最後の勇者を殺しに来てやったぞッ！」

そして、なんと指輪を身に着けた骸骨——つまり噂の四天王ことポコチン本人が、魔物の群れの中央から出てきた。

まるでこの軍団は私が連れてきましたと言わんばかりの、ド派手な登場の仕方だ。

それを目の当たりにした六代目と八代目が、俺の背後に隠れながらコソコソと耳打ちをする。

『おい十代目、分かってると思いが』

『ポコチンはああいう性格じゃないよ』

もちろん。

そんなことは百も承知だ。

コソコソ隠れながら勇者を殺してきたような奴が、いまさら大仰な名乗りをあげて、相手の目の前に姿を現すはずもない。

中央にいる指輪骸骨は十中八九デコイであり、本物は別にいるのだろう。

「——よし。じゃあ、とりあえず敵討ちでもしましょうか」

唐突に、一週間繰り上げで、因縁の対決が始まった。

とはいえ、シリアスに事を構えるつもりはない。

相手は現状手に入る情報だけで作戦を組み立てているに違いないが、こちらはゲーム

オーバーになったプレイヤーから直接攻略情報を聞き出すという、反則同然の下準備をしているのだ。

冷静に分析して、まず負けることはあり得ない。

「六代目。最初はどこに攻撃されました？」

『左足のアキレス腱だな』

聞いた瞬間、地面を蹴って飛び上がる。

すると、おそらく短時間の透明化魔法を使っていたであろうゴブリンが姿を現し、先ほどまで俺がいた空間をナイフで斬った。

「あー、八代目」

『飛んで避けたら、後頭部に矢がズドン』

腰の鞘から聖剣を引き抜き、剣背で後頭部をガードする。

ほどなくして、彼方より飛来した矢が剣にぶつかり、致命傷を負うことはなかった。

空中で振り返ると、遠くの樹木の太い枝の上に、フードを被った人影が目映る。

慎重すぎるが故に、最後は確実に自分の手で命を刈り取る——アレが本体だ。

……

……

「ほんとに勝てちゃったよ……」

数分後。

特に見せ場があるわけでもなく、スーパー聖剣パワーでポコチンを木端微塵に粉砕した結果、先輩たちの敵討ちは至極あつさり終わりを迎えたのであった。

ポコチンは確かに狂暴かつ狡猾で、四天王と呼ばれるにふさわしい用意周到さではあつたのだが、どうやら腕つぶしが強いわけではなかったらしく、聖剣の光で本体にマークを付けた後は、ほとんど消化試合と化していた。

まあ、それもこれも先輩たちがアドバイスをくれたおかげだ。

俺自身に戦闘センスが備わっているわけではないので、彼ら彼女らがいなければ、きつと敗北していただろう——そう思えるほどにポコチンは危険な相手だった。

「……お前の敗因は、勇者を殺しすぎたことだな」

風と共に霧散していく彼の亡骸から、戦利品の指輪を拾い上げる。

そして、多くの勇者を手にかけてきたその執念にだけは敬意を払い、彼の肉体が消えてなくなるその瞬間まで、最期をしかと見届けたのであった。

ただ、まあ、悪質な敵だったことに変わりはない。

コイツの名前は後世に遺るだろうが、そこにあるのはロモディンではなくポコチンの

四文字だ。

名前を覚えられるだなんて贅沢はさせない。

先輩たちの倍くらいは名誉を傷つけられたまま、大人しく死んでもらうことにしよう。

さて、これで実家に帰ろう作戦の、第一段階の進捗が大幅に進んだわけだが、ここで俺の背後霊に質問だ。

「で、翔太郎。さっきお前が言ったこと、もう一度言ってみろよ」

「……いや、いい。忘れてくれ」

「ダメだ。あの女装アカウント、大学の同期にバラすぞ」

「う、うう……」

珍しく弱気な翔太郎は、視線を右往左往させて落ち着きがない。

その理由は、ポコチンを倒した直後に、コイツ自身がぼそりと呟いた言葉にある。

「……その、ここにいる先輩たちの分のホームクルスも、作れないかなって」

本当に、困ったことを提案してきやがった。

俺たち二人だけでも、元の世界に帰るのが大変だって話なのに、救助する対象を増やしてどうするんだ。

確かに翔太郎はおっぱいコンプリート作戦に協力してくれてるし、先輩たちもこれま

での冒険のアドバイスや、今回の四天王とのバトルにおける重要なサポートはしてくれ
たが……あれ。

——俺、結構お世話になってね？

しまった、コレは参ったな。

物理的にも俺の気持ち的にも、先輩方を助ける理由が、かなり沢山存在してしまつて
いる。

……ダメだ。

クールなキャラを演じる中で、非情で徹底で現実で即した合理的な判断ができるよう
になったと思つていたが、どうやら全然勘違いだったようだ。

おっぱいを揉む。

親友を蘇らせる。

先輩方に恩返しする。

やる事がだんだん増えてきて、なんか逆に楽しくなってきたな。

これは俺個人のポリシーになるが、自分に対して好意的に接してくれた相手には、な
るべく同じように好意を返し、恩義があるならそれに報いるべきなのだ。

結果、大学で増えたのは、金と女に飢えたアルコール中毒の腐れ縁共だったが、毎回
そうとは限らないだろう。

少し大変だが、先輩たちの分のホムンクルスも用意する。

しかし、問題が一つ。

翔太郎は幽霊で、先輩たちは亡霊——その違いは非常に大きい。

「仮にホムンクルスを用意したとして、だ。お前と違って先輩たちは肉体を得ても、元の遺体があるこの場所からは動けない。そこんとこどうするって話よ」

「……元の肉体が別の場所にいったら、彼らもそこに行くの？」

「ああ、この墓地に楔を打たれてるわけじゃなくて、遺体のある場所が先輩たちの魂の残留位置になる」

昔、魔王軍のネクロマンサーから奪い取った魔導書の情報を、ドヤ顔でひけらかすと、翔太郎は数瞬考える素振りを見せたあと、何か思いついたようにパツと顔をあげた。

「——遺体を持ち歩けばよくない？」

その結論は、なんとどうか。

「お前、それは。……いや、いいな」

またしても、目から鱗な意見であった。

亡霊は、遺体のそばから離れられない。

亡霊は、質量を伴う物質に触れることはできない。

しかし仮に、遺体に触れることができ、遺体を持ち運ぶことで、常に魂の座標を移動

させられる肉体があるとすれば、亡霊は自由に行動ができるということだ。

さすが相棒。

シリアス顔して俺の凝り固まった思考を揉みほぐしてくれた。とてもたすかる。

「先輩方に質問です。外見は選べませんが、とりあえず生き返りたい人」

質問の結果、全員が手を挙げた。驚異の団結力ですね。

意見が揃ったのなら、やることは一つだ。

さっそくホムンクルスの錬成を始めよう。

必要なのはこの指輪と、術式を書き記した紙と、素材を代替する聖剣の光だ。

聖剣のパワーは、基本的にひなたぼっこで得た太陽エネルギーであり、この世界の人間と違って体内に魔力を持たない俺たち勇者が、それを引き出すために必要なのは、ズバリ生命力。

平たく言えば——気合いである。

……

……

「わはははは——っ！　これで俺もネクロマンサーだアッ!!」

『がんばれ十代目え〜』

というわけで、聖剣と指輪のパワーを存分に発揮し、ホムンクルスと彼女たち用の簡易的な衣服を、ジャカポコ錬成しまくっていく。

作るのは残り一体。

九代目だけは消息不明で、この墓地にはいないため、現在七体を錬成したことになる。既に全力でシャトルランをやり終えたあとにそのまま長距離馬拉ソンしてるくらいには疲弊しているが、なんのこれしき。

「はあつ、ハア、出来た……は、八代目、どうぞ……」

『ありがとう、十代目。よしよし……あつ、まだ触れないんだった』

サウナにいてるのではないか、と錯覚するほどの滝汗を流しながら、錬成した最後のぺったんこロリっ娘ハーレム完成だ……疲れた……」

「これでロリっ娘ハーレム完成だ……疲れた……」

「お疲れ様、間宮。僕の方は聖剣のエネルギーが補充されてからでいいからね」

「ああ、すまんな翔太郎。これ以上の錬成はちよつと厳しいわ」

「こうしてワガママを叶えてもらったんだ、文句なんてないよ。」

「……ところで、どうして今回は男性型のホムンクルスを作らなかつたんだい？」

……。

「……」

……………。

「間宮？」

では、次なる工程へ移ることにしよう。

先輩たちに肉体を与えたら、今度は彼らの遺体を持ち運ぶ方法の模索だ。

模索、とは言ったものの、実は既にほとんどやり方は決まっている。

「ねえ、間宮」

流石に腐乱死体が梱包された、デカイ棺桶を携帯するのは不可能なため、ここは我が故郷ニポンの知恵をお借りすることにした。

その名も火葬。

魂の座標確認に、遺体の状態の細かい要求はないため、燃やして軽くして砂袋にまとめれば持ち歩けるといふわけだ。

「間宮あ……」

「ちよ、泣くなつて！　しょうがねーだろ、少女型のテンプレしか手元にないだから

！」

「うええええ」

「ああ、クソ……先輩たち、ちよつと慰め手伝ってください」

「はこよおー」

翔太郎の心境は察するに余り有る。

これエロシーンいる？と感じるような清纯で王道な成人向けゲームでも、余裕で性消費に使っていた本物のエロゲーマーに、この仕打ちはあんまりである。

だが、こればかりは本当にどうしようもないのだ。

大前提として、この世界におけるホムンクルスの錬金学が、全くと言っていいほど進歩していない。

物理的に存在しないのだ。この2Pカラー程度しか違いのないバリエーションの、ロリっ娘ホムンクルス全四種類しか、この世にない。

最初は俺の技術不足だと考えていたが違った。

ポコチンがこの指輪を持っていながら、一体もホムンクルスを戦場に連れてきていなかった理由が、今ならわかる。

このちんまくてかわいいだけの、まるで強みのないロリっ娘——しかも魂を装填しないと意志すら持たない人形を、優先して使う理由など、魔物たちには思いつかなかつたのだろう。

かわいそうに、哀れな翔太郎。

「うあああああ」

「翔太郎……」

「こっつ、これじゃあ女装コスプレに釣られたオタク共を『ごめんね？実は男なんだ、私』ってネタバラシして嘲笑うことができなくなっちゃうじやないかああああ……ッ！」

絶望の方向性が、予想の斜め上だった。

「憎い、この国が！ 滅ぼしてやるう！」

「別に残つても構わんけど、さすがに国家転覆までは付き合わないぞ俺」

「やだー！ 置いてかないで間宮!!」

耳元で騒ぎ続ける親友のことは一旦置いて、肉体と行動の自由を与えた先輩たちのほうへ向き直った。

彼らには伝えなければならぬ事がある。

「先輩方、俺らは郊外に戻って、聖都で暴れてる魔物の軍団を掃討しに行きます。あんたらは自由になりますけど、一応このスマホもどきだけは持つといてください」

まるで夏休みのラジオ体操のように、一列にいらんだ少女たちにスマホサイズの半透明の板を配っていく。

これは疑似的な電話が可能になる代物だ。

二回使用したらぶっ壊れてしまうが、必要最低限の連絡程度ならコレで十分だろう。

「あと二、三週間後くらいには、元の世界に帰れる方法を確立させとくんで、帰りたい人

は早めに連絡くださいね。それじゃ」

「十代目えー！ おおきにー！」

「困ったときは助けに行くからねー!!」

手短に済ませ、先輩ロリたちに見送られつつ、墓地を去った。

一応あの人たちは元勇者なので、安全面のことを考えると、このまま聖都に連れて帰るわけにはいかないのだ。

それに、疑似的な蘇生に関しても、恩を着せるつもりはない。

彼らは俺に攻略法を教えてくれて、その分をこうして返した、というだけの話だ。

道中遭遇したエクストラステージのことは攻略したと考えて、そろそろ俺は俺の冒険に戻ることにしよう。

聖都が襲われるという一大事に、一人だけいなかった勇者——これは何かあると、そう思われるに違いない。

しかも四天王の一人を倒したとなれば、どんなシリアスな事情に巻き込まれていても不思議ではない。

今回のこれは突然発生したエクストラステージだが、シリアスムーブで巨乳を揉みしだくための下地を用意できたことを鑑みれば、決してただの寄り道ではなかったということになる。

結果オーライ。

計画も前に進んだし、先輩たちもあの辺鄙な墓場から出られたし、良いこと尽くめだ。「……で、六代目と八代目は、何でついて来てるんですか」

絵面がロリ二人を騙くらかして誘拐しようとしている、怪しいお兄さんにしか見えなくなってるので、両サイドから挟んでくるのはやめてほしい。

そもそも何でいるんだ。早く逃げなさいよ。

「聖都が襲われてるんだろ！ エレナを守りにいかねーと！」

「ウチも久しぶりにエレナちゃんの顔みたいなくっつて。……あと、十代目の助けにもなりたいんだあ」

なんとという仲間愛と優しさに満ちた人たちなんだ。

これでもし錬成したホムンクルスが爆乳だったら、既におっぱい触らせてくださいとお願ひして断られてるところだ。危ない危ない。

「そういうええ十代目って、おっぱい揉む為に頑張ってるんだっけ。体はホムンクルスだけど、ウチの触る？」

「フツ……触る胸がないレベルのロリじゃないですか。その優しさだけで十分ですよ」

「そう？ うーんと……なら、ちゅーとか？」

……。

……!

「な、なんすか八代目。俺のこと好きになっちゃいました?」

「そりやあ普通に大好きだよ。ね、六代目」

「ああ。まったく、自慢の後輩だぜ」

まさか、これが噂に聞く、好感度上昇バグというやつか。

まさかそんなまさかまさか。

そうか……そ、そうかあ……。

「じ、じつ、じゃあ、聖都の敵を片づけた後に……」

「アハハ、鼻の下伸びてるんだ。やらしく」

あッ!!? こ、このメスガキ……ッ!!!

6話

「はあア、ーつ、ハアツ……だ、大丈夫か、エレナ……」
「え、ええ……なんとか」

魔物の軍団が暴れている居住区へ向かった直後のこと。

戦場となったそこへたどり着いたとき、民家を襲う魔物たちと戦っているエドアール側の戦力が、実質エレナだけだったことに、俺たちは気がついた。

どうやらロモ……ポコチンのやつは、俺の殺害計画に相当念を入れていたようで、勇者墓地に一番近い居住区からの援軍を強襲によって防ぐだけではなく、聖都の兵たちがその居住区へ向かうための道までも、数に物を言わせた魔物の大群で封鎖しているらしかった。

そういうわけで、この居住区にいる味方は常駐している警備兵と、空を飛ぶことで道の封鎖を無視して現場に急行できる、魔法使いのエレナだけだったようだ。

雑魚の寄せ集めとはいえ、物量だけは一人前な魔物たちが相手では、流石に大賢者の弟子であるエレナも一筋縄ではいかず、警備兵が民間人を避難させる都合上、ほぼひと

りでここを任されていた彼女の負担は絶大なものであった。

というわけで、勇者乱入。

そこらへんで武器を拾った先輩たちの助力もあって、居住区を襲った敵は、だいたい片付けることができた。

しかし、ホムンクルス錬成で、スーパ―超絶に生命力を消費した直後の戦闘は、さすがに肉体が堪えたのか、俺はふらつきを抑えられないまま重力に従い、仰向けに倒れてしまった。

「勇者っ!」

咄嗟にエレナが受け止め、そのまま膝枕に移行し、即座に簡易的な回復魔法を発動し始めてくれたため、大事には至らなかったものの、普通に肉体が限界なのでハチャメチャに眠い。

あと膝枕されてる影響で、視界がエレナの下から見たデカおっぱいで真っ暗だ。

「ぐぬぬ……」

「大丈夫だぞ、十代目。残りはオレたちが始末しておくから、おまえは暫く寝てなさい」
「そうそう。あとはウチらに任せてねえ」

じゃあ、お言葉に甘えて、あとはよろしくお願いします先輩方——なんて返事もままならないまま、俺はエレナのちよつと蒸れた下乳の香りを胸いっぱい吸い込みなが

ら、下半身の一部が隆起するよりも早く、意識を手放してしまうのであった。



——この二人は、あの二人なのではないかと。

視線の先で戦う二人の少女を前にして、そう思えてならないのだと、アタシの記憶が叫んでいた。

タイガを新たな勇者として迎えてから、もう半年が経過しようというのに、未だ脳裏に焼き付いている、あの少年と少女の顔がチラついて止まらない。

勇者の十代目にあたるタイガが、この世界へ召喚されるよりも前——アタシは三人の勇者とパーティを組んだことがあった。

一番最初に行動を共にした勇者であり、妙に馴れ馴れしかった六代目こと、トウマ様。同じパーティに所属するも、仲間として関わりを持つよりも早く、魔物との共存を目指すと言って聖都を飛び出し、遺体となって戻ってきた七代目勇者。

そして大賢者の弟子でありながら、勇者を二人も死なせた愚か者として師匠に投獄され、一年間の幽閉を経てから、新たに出会った、八代目のサヤ様。

誰も彼もが、中途半端なところで脱落した。

腕は確かだった。それは疑いようのない事実だ。

聖剣の力を存分に引き出せているという点を鑑みれば、勇者としての資質を疑う余地はなかった。

しかし、ダメだった。

だって、いつの間にか死んでいたから。

自分がいるから大丈夫だとか、明るい態度で希望に満ちた発言ばかりしていたのに、アタシの見ていないところで、彼らは下級モンスター群れの中心で命を落としていたのだ。

ちいとやらで、仲間を守り続けるんじゃないのか。

復讐のためだけに生きるのはきつと辛いから、一緒に楽しいことを見つけていこうと、そう言っていたではないか。

最初からそんなこと言わなければ、こつちも落胆なんてしなかったのに。

——この世界は理不尽だ。

身に覚えのない歴史が因縁となって、アタシの生まれたときから既に、魔物と人間は戦争をしていた。

聖剣が魔王によって制限をかけられ、この世界の人間には扱えない代物になってから、この国も手段を選ばなくなったらしく、気がつけば異世界人の召喚などという禁忌

にも手を出していた。

だが、そんなこと、アタシにはどうしようもない。

アタシ一人では、人間と魔物の戦いは止められない。

ちつぽけなただ一人の人間では、異世界からの実質的な拉致という、国の最高指導者が下した決定に対して、連れてこられた本人への同情だけで、命をかけて反旗を翻せる理由もない。

だから、思考を停止した。

故郷を滅ぼした相手への復讐だけを考えればいいと、自分自身を極限までシンプルにした。

優しかった母を、育ててくれた父を、暖かい居場所を与えてくれた村の人々を塵殺した、あの憎き竜を殺せればそれでいいのだ、と。

ただその判断が、自分自身を狭量な人間にするだけの悪手だったことに気がついた頃には、すべてが遅かった。

タイガは墓石の前で泣き崩れ絶望し、トウマ様もサヤ様も故人となっていた。

「ふー……終わった。まだ割と残ってたな」

「そだねえ。十代目が寝る前にバフかけてくれて助かったよ」

故人となった——はず、なのだが。

「いこ、六代目。ウチら教会にバレたらやばいし」

互いを「六代目」、「八代目」と呼び合い、タイガを十代目と呼称する、あの少女たち。

彼女らの姿には、見覚えがあった。

師匠の書庫にあった本の中に、ホムンクルスについての概要が、少しだけ記述されたものがあり、その一例として挙げられていた完成体の絵に、あまりにも酷似しているのだ。

「——待ってください」

付近の無人となった民家にタイガを寝かせ、そこから出ていこうとする少女二人を、後ろから呼び止めた。

二人は分かりやすく肩を跳ねさせ、玄関に向かっていた脚がピタリと停止する。

「……トウマ様と、サヤ様……なのですか？」

その質問に、彼女らはあからさまな狼狽を見せつつ、首を横に振った。

「な、何のことだかサツパリだぜ。なあ八代目？」

「そつ、そのとおり。ウチらただの旅人なんで……」

「……八代目と、言っています」

「あつ！」

あわあわと慌てて口を塞いでいるが、もう遅い。

それ以外の互いの呼び方を考えていなかったのか、トウマ様もサヤ様も、これよりも前に何度かボロを出している。

ので、疑惑は確信に変わっていた。

どういうわけなのか、二人は肉体をホムンクルスに変えて、いまアタシの目の前で生きています。

経緯は不明だが、事実としてそうなっている。

困惑する心を無理やり押さえつけながら、アタシは玄関を塞いで、二人の前に立ちふさがった。

「……く、詳しく説明をしてください。とてもではないですが、アタシはいま冷静さを欠こうとしています。誤魔化されたら、このまま教会に連絡してしまうかも……」

「ぎゃー！ わかった話す！ ちょっと落ち着け、エレナー！」

強めの脅しが功を奏したようで、二人は諦めて肩を落とし、ぽつりぽつりと事情の説明を始めてくれた。

曰く、タイガが四天王の一人を倒した。

潜伏先を発見し、約一週間後に強襲をかける予定だった、指輪の骸骨が勇者墓地で逆

に襲い掛かってきたため、返り討ちにしてやったと。

名前は知らなかったが、どうやらポコチ——い、いや、この名前本当か？
そんなことあるのか。

……とりあえず、彼女らが言うのなら、そうなのだと言いつつ切るとして。

その、ポコなんとかを倒した結果、タイガは敵の指輪を入手し、使い方が分からず四苦八苦していると、その力によって偶然ホムンクルスが生まれた。

結果的に、亡霊の状態でこの世を彷徨っていたトウマ様たちが乗り移り、現在に至る、
とのことだった。

「……そう、ですか」

後ずさり、全身から力が抜けていくのを感じる。

知らなかった。

異世界から召喚された人間が、この世界では死後も昇天することはなく、意識と魂を遺体のそばに拘束され続けるだなんて事実が、今この時をもって初めて知った情報だった。

数年間、二人はあの薄暗い墓地で、時が止まったようにただ存在していた。

いや、彼らだけでなく、この世界へ召喚された、タイガと九代目を除く、すべての勇者がそうだったのだ。

その心境を察することは、この世界の人間である自分には叶わない。彼らは一体どんな気持ちで、あの墓地の亡霊でい続けたのだろうか。

「四天王、が……」

そして、二人を葬った存在が、低級モンスターに化けていた、四天王の一人だった事実も浮き上がり、混乱で思考が止まりかけてしまう。

勇者たちの死因に気づかず、ただ冒険を続けていた自分は、なんだったんだ——と。
「エレナちゃん、だいじょうぶ……？」

少女の一人が寄り添おうと近づいたが、手を前に突き出して制止した。

「……そんなの、思わないじゃないですか」

怪しい言葉遣いになっていることを自覚しながらも、感情がそのまま口から出てきて止まらない。

「二人とも、楽観的だったから亡くなられたんだって、そう思ってたのに……」

「あ、あはは……」

「生きてる時のオレたちが、如何に軽薄そうなヤツだったかが、よく分かるセリフだな……」

命がけの任務なのに、二人とも異様に明るしいし。

「トウマ様は、事あるごとに頭を撫でてくるし、たまにこっそり着替えを覗きに来るし

……」

「うっ——」

少女が一人、膝をつく。

「サヤ様は、スキンシップとはいえ距離が近いし、アタシが口につけた水筒を欲しが
し、水浴びのときは『全身洗ってあげる』と言って迫ってくるし……」

「はうウッ——」

少女がもう一人、膝をついた。

「コソコソ……おい八代目、なにしてんだよお前……!」

「だ、だつて男の子も女の子も、どっちも好きなんだもん……特にエレナちゃんかわい
し。ていうか六代目もヒトのこと言えなくない……?」

それから、もうひとつ。

「……あの、相変わらずみたいなので、この際言わせていただきますが、冒険中も今現在
も——アタシの胸を見過ぎです、お二人とも」

バタバタ、と死んだように二人の少女が倒れ伏した。何やつてるんだこの人たち。

——彼らが善良な人間だということは、最初から分かっていた。

世界を救済する資格のある人間こそが、聖剣に適合できるため、召喚陣に反応してこ

の世界へ呼ばれた時点で、二人の根底にある属性が、ヒトにとつての“善”であることは明確だった。

けど、二人とも、ちよつとばかり……というか結構なセクハラ人間だし。

勇者パーティの一員として、拒否しないようにはしていたけど、こんなえつちな人たちが勇者なはずはないと、アタシは考え続けていた。

アタシの中にあつた勇者像は、清廉潔白な白馬の王子様という、最近の幼い少女でも恥ずかしくて思い浮かべないような、理想の人物だったから。

タイガが寡黙で理性的な分、余計に彼女ら二人のアレさが浮き彫りになってきて、心のどこかでこの二人を嫌いになりたがつていたのかもしれない。

でも結局、思い返してみれば、やはり二人は優しいひとだったのだ。

「……申し訳、ごさいませんでした」

「えっ」

復讐だけを目標に、打ち解けようとしなかつた自分を恥じた。

「待つて待つて、この流れで謝るのウチらのほう！」

「オレたちこのままだと、セクハラして相手に謝らせたヤバイ勇者になる——」

タイガが復讐を果たさせてくれたおかげで、狭まっていた視野を広げることができていたわけだが、もう少し早くこうなっていれば、どれほどよかつたことか。

アタシに気を遣って、トウマ様は先行した。

復讐優先で自暴自棄になりがちなアタシを心配して、サヤ様は単独で群れを討伐しに向かわれた。

もう少し、仲間として、接していれば。

そんな後悔が胸の内からこみあげてくる。

タイガに夢中だった。

今も、きつとそうだ。

この二人が目の前に現れさえしなければ、こんな気持ちになることは、おそらくなかったに違いない。

ただ、墓標を何度も訪ねて、軽く贖罪した気になって、満足する日々だったかもしれない。

肢体など、見ればいい。

胸など勝手に触ればいい。

自分の世界から切り離され、ここに呼ばれた彼らの気持ちは、帰るべき故郷を失ったアタシこそ理解しなければならなかったはずなのだ。

「こ、こつちこそゴメンねえ……！ あわよくばおっぱい触れないかなって思いながらスキンシップしてました……」

「すまなかった！ 結局エレナを置いてく形で死んだのは事実だし……ごめんっ！」

「アタシが、む、胸なんか触ってもいいと、言葉にしておけば……」

「それは違うんじゃないかな!？」

そうして、お互いに感情を、思いついた言葉を後先考えずに出し続けて。

ようやくアタシと彼ら二人は、仲間としての距離を、ほんの少しだけ縮めることができたのであった。



——ハッ。

意識が戻った。戦況は、現状はどうなっているんだ。

「でも、やっぱりタイガが一番好きです……」

「ここ、こんな後輩のどこが……あ、いや、確かに良いとこしかない……？ クツ、自慢の後輩め……!」

「ウチは六代目も好きだよお。十代目とエレナちゃんの次くらいに」

「うううっ……! 悔しいのに後輩が立派に勇者してて誇らしい……!」

現状。

どこかの民家のベッドの上で、仲間の魔法使いに膝枕されながら、少女三人の団欒の中心。

上におっぱい。

左右にロリの柔らかい肢体。

即座に、これは夢だと断定し、俺は再び夢の中へと二度寝を決め込むのであった。
おっぱい。

7 話

——は？

なんだ。

誰だ、あの少女たちは。

勇者墓地で強敵を倒されたタイガ様が、居住区で戦うエレナさんの加勢に向かわれたと聞いたから、魔物の群れの間を縫うようにして、全速力で現場に到着したら——意味不明な光景が待っていた。

住民の方が避難され、無人となった家の中で、エレナさんがタイガ様に簡易的な回復魔法を施していたが、これはまだ分かる。

おそらく連戦に次ぐ連戦で、タイガ様の疲弊は限界に達していたのだろうし、あの膝枕も、魔法を使いながら肉体を密着させることで、こちらの魔力も生命力に変換して注ぎ込むというやり方があるため、理にかなった回復方法だ。

エレナさんだから、わかる。

勇者パーティのメンバーが、彼を効率的な方法で回復させるのは、至極当然のことで

あるから。

だが、あの二人の少女は、なんだ？

なぜエレナさんと打ち解け、気安い態度でタイガ様のそばにいるんだ？

意味が分からない。

わたしがいない間に何があつたというのだ。

ともかくまずは殴つてでもあの二人をタイガ様から引き？がして、この場所から叩き出して、早急にわたしが彼を回復させてあげないと。

……………いや、ちよつと、待て。

落ち着こう。

冷静に。

すぐに暴力を持ち出すのは、よくないことだ。

神父様も、俯瞰して物事を見るようにと、仰つていたではないか。

彼女たち二人は、確かにタイガ様と近すぎるし、あわよくば触れようとしているし、今すぐにも四肢を削ぎ落して祭壇の供物にしてやりたいくらいには、腸が煮えくり返る思のだが、まずは落ち着いて状況を判断しなくては。

そうだ、あの砂袋を腰に携えた彼女ら二人はきつと、現地の協力者だ。

玄関の横には、数刻前に使つた形跡のある武器が置かれていたし、タイガ様が動けな

なくなったあとに、魔物の掃討を引き受けてくれたのだろう。

味方になってくれたからこそ、エレナさんとも打ち解けている。

あそこまでタイガ様に接近しているのは不本意だが、まずは協力してくれたお礼を言わなければ――

「……つたく、十代目め。のんきに眠りこげやがって。ほっぺつついてやる、うりうり」

――ツ。

「あの」

ダメだ。

神父様からのお教えを忘れるな。

恩義ある人間に対して、仇で返してはいけない。

暴力は最終手段であり、聖職者である以上は、理性をもつて人と接しなければなら
ない。

落ち着け。

冷静になれ、アイリスゲイド・ストレンジャー。

あの少女の行動に、他意はない。

もしかしたら、タイガ様ご本人が、そういった態度を許しているかもしれないのだ。自分で勝手に判断するな。合理的に、常識的に考えろ。

「あつ、アイリス。来てくれたのね」

いつもの、勇者パーティのヒーラーの、普通のアイリスとして。

大丈夫。

ぜんぜん、だいじょうぶだ。

「はい、お待たせしました、エレナさん。そちらのお二人も、この度はご協力ありがとうございます。ございます。わたしは勇者パーティの回復担当のアイリスと申します。タイガ様が疲労困憊で移動もままならない状態だということは把握していますので、以降の回復はわたしにお任せください。というわけでそこ、失礼いたしますね。……あの、申し訳ありませんが場所を空けていただけますでしょうか」

◇

再び目を覚ました時、目の前にアイリスがいたことで、俺は少々の不安が脳裏に過っていた。

アイリスの回復魔法自体は一級品だ。

術式無し、道具無しで、即座に行える回復魔法の効力の高さで言えば、聖都で最も優れているといっても過言ではない。

だが、強力すぎるがゆえの欠点というものも、いくつか存在している。一つ目は行動不可になる点だ。

回復魔法を受けている本人と、発動しているアイリス本人はその場から動けなくなるため、これは他のメンバーがカバーしてもらおうことで補っている。

もう一つは、回復しすぎてしまう点である。

体力、つまり生命力の回復とは、精力の増加ということでもある。

言葉を選ばずに言うのなら、アイリスの回復魔法を受けた後は、元氣過ぎてめっちゃムラムラする状態になってしまう、ということだ。

いつもは携帯している冷水で顔を洗ったり、気分を落ち着かせる鎮静薬を飲むことで対処しているわけだが、もともとパーティと行動する予定がなかった今この状況に至っては、それを一つも持っていない。

こまった。

とても、ムラムラする。

本来であれば性欲の権化みたいな時期の年齢という、初期値から既に高い俺の性欲が、アイリスの魔法によって倍々に増えていったら、どうなるのか。

それはもう、端的に言つて地獄である。

クールキヤラなんぞ演じるんじゃなかったと、後悔ばかりが湧いてくる。

「あ、アイリス。ここにいた俺の仲間は、どこに行ったんだ？」

ベッドから体を起こすと、看病するように傍らで座っていたアイリスが、窓の外を見ながら返事をする。

「エレナさんは外に出てすぐのところ、騎士団と情報共有をしています」

「もう二人、いなかったか」

「あ、旅人のお二人のことですね。ドネルケバブ様と、さやえんどう様」

あの二人、偽名使うにしても、他にもう少し候補なかったのか。こっそり隠れて生活しないとなのに、印象に残りやすすぎるだろ、ドネルケバブ。

「先を急ぐとのことで、既に出立されました」

やはりというか、二人の姿はなかった。

アイリスからすれば他人同然で、事情を共有していないはずのエレナからしても、引き留める理由はない。

一度目を覚ました時に、三人で何か話していた気がするが、困憊となにかしらの衝撃で二度寝した俺には、詳しい状況はわからない。

とにかく、無事に逃げられたのならそれでいい——とは、思いつつも。

……結局、八代目はキツ、き、キツ……キス、してくれなかった。
何だあの人、からかい上手の八代目じゃねえか。

寝落ちした俺も悪いけど、なにかしら伝言を残して、あとでどこかで合流して……とか、いろいろあつたんじやないかなと、いろいろ考えてしまう立場なんだよ、こっちは。くそう、せつかくのチャンスが。

アホみたいにムラムラしている現状では、あの提案をしてくれた先輩が、あまりにも魅力的に思えてしまう。

ちゅー、したかった。

あわよくばその先も考えていた。

俺の目標のひとつに“おっぱいを揉む”というものがある——しかし、それは何も一度揉むことができれば満足して終わり、という話ではないのだ。

こちらら性欲を持って余した大学生。

いけるところまでいけるなら、そりやもちろん、いけるとこまでいきたい。

あわよくば二度、三度と繰り返し返したい。

最終的には俺の世界へお持ち帰りしたいとすら考えている。

しかし、それが不可能だからこそ、シリアス顔して相手に深読みさせることで、何か事情があると思わせつつおっぱいを揉んで、なんとなく許されたまま帰るといった作戦を

とつたのだ。

パーティーメンバーは、あくまでパーティーメンバー。

アイリスもエレナもシャルティアも、この半年間しつかり俺と適切な距離を取って、共に行動していた。

原因は俺のいきすぎたクールキャラにもあったのかもしれないが、ともかく、よくある異世界転移物語のように、俺のこと好き好き大好きヒロインは、残念ながらこの世界には存在しないのだ。

八代目のアレもからかいだと判明した以上、やはり当初の作戦通り、シリアスに何か事情ありげに乳を揉むというやり方にシフトするしかない。

俺にはもう、これしかないんだ。

ムラムラして、もう止まらないのだ。

「……アイリス」

隣にいる彼女の顔を見つめる。

この少女が、どこまで事情を知っているかは知らないが、少なくとも彼女には“泣いている仲間を慰める”といったレベルの抱擁力は備わっている。

加えて、俺のこともその庇護の対象になっていると見て、間違いはない。

翔太郎の墓場で泣き散らした俺を見て、その日のうちに明るい雰囲気でご飯を作ってくれたことから、決して嫌われているわけではないのだ。

「はい、どうされました、タイガ様？」

かわいい。

そして、シスターっぽい服の上からでも分かるほどに、胸の巨峰がクソデカイ。

「……色が、見える」

「えっ」

「四天王の指輪を、装備したせいなのかは、わからない。ただ、お前の魂の色が、見える」

「魂の、色……あつ、た、タイガ様……？」

揉める。

仕方のない事情を匂わせる雰囲気さえあれば、アイリスのふざけたロリ巨乳おっぱいは、揉むことができる。

始まったんだ、今この場で、俺の戦いが——！

8話

私は人間でありながら、魔物だった。

聖騎士シヤルティアという名を得たのも、つい最近の話だ。

所属は魔王軍側であり、故郷も家族も、普通の人間のソレとは異なっている。

捨てられた幼子である自分を育ててくれた、魔物の父に報いるために、スパイとして聖導国家エドアールの騎士団に潜入したのが、二年ほど前の話だ。

受けた命令は、勇者と呼ばれる異世人の監視。

必要であれば、彼らの暗殺——それが主な任である。

……だったのだが、ここ数カ月の私は、魔王軍の一員としての自覚が、少々薄れてきた気がする。

勇者は事故で命を落としたり、四天王に討伐されたりで、私自らが手を下したことは一度としてなく。

その状況を憂いて、もっと間近で監視するために勇者パーティへ加入したにもかかわ

らず、彼らとの日々が思いのほか楽しくて、とうとうタイガが勇者になってから、無事に半年が経過してしまった。

ダメだ、これでは。

父に合わせる顔がない。

というわけで、勇者討伐の実績が一番高い幹部である、四天王のロモディンに、本日勇者が単独行動をする旨の情報を流した。

これでいい。

私は魔物。体は人間だが、心は人間ではないのだ。

タイガたちと過ごす時間は、一時の夢に過ぎなかった。

こうして裏切り、もう物理的に戻れない状況に自分を追い込んでしまえば、未練も躊躇も消え去ってくれるはずだ。

聡明な彼のことだから、勇者墓地へ向かう情報を流した犯人が私だということには、既に気がついていることだろう。

エレナは人類至上主義を掲げる大賢者の弟子にして、勇者パーティの最古参。

アイリスは魔物が立ち入れない聖教会出身の聖女——と、ここまで来ればあとは、不自然なタイミングでパーティ入りした私しかいない。

ので、もう覚悟は決まっている。

次にタイガと相対するとき——私たちは命の奪い合いをすることになるだろう。既に騎士団は抜けてきた。

私を慕ってくれていた、見習い騎士の少年にだけは別れを告げ、聖騎士の証である鎧と剣も置いてきた。

このエドアールで、少なからず得た人間らしさというものを全て捨ててきたのだ。ここまですればきつと、タイガが相手でも戸惑うことはなくなるはずだ。

「さらばだ、私の友人、私の勇者——」

居住区にある一軒家。

現在、タイガとアイリスが休憩場所として使っている住居。

そこへ、大爆発を引き起こす火球を放った。

彼らがこれで死ぬとは思っていない。

これは言うなれば、訣別の意味を込めた攻撃だ。

今この時をもって、私は人間から魔物へと戻る。

火球が直撃した木造住宅は、一瞬で大爆発を引き起こし、跡形もない焦土と化した。けたたましい爆発音を耳にして、騎士団とエレナが駆けつけるのも、時間の問題だろ

う。

そのまま黒煙が霧散するのを、ただじっと待つ——すると、やはりその中からは、金髪の少女を抱きかかえた青年が、ほぼ無傷で出てきたのだった。

殺気に反応して、バリアを張ったらしい。

アイリスを抱きかかえているアレは、確か「お姫様抱っこ」というやつだったか。

ああ、懐かしいな。

深手を負った私を、暴走したゴーレムの攻撃から守るために、一度だけタイガがああの形で抱えて逃げてくれたのを、よく覚えている。

これまで生きてきた中で、私をまともに女性扱いしてくれた、数少ない存在……勇者タイガ。

やはり彼は、いつ見ても、陰険な自分にとっては眩しすぎる存在だ。

「——邪魔をしてくれたようだな、シャル」

タイガが、真つすぐに私を見つめて、いつもの落ち着いた声音で呟く。

シャルティアと名乗る自分を、シャルと愛称で呼んでくれるのは、勇者パーティーの三人だけだ。

だが、きつとそんな事実も霧散する。

国内に侵入していたスパイ、裏切り者のシャルティアと呼称され、愛称があつた事実

など、誰もが忘れていくのだろう。

「アイリスは気を失っている。爆発の衝撃もあるだろうが、お前から攻撃を受けた事実が余程ショックだったんだらうな」

「……そうか。それは、悪いことをしたな」

心にもない発言だ。本当は、殺すつもりで撃つたのだから。

「シャル、今回の攻撃の意図を聞くつもりはない。お前にも事情があることは百も承知だ」

タイガは極めて勇者らしく、平静なまま状況を理解し、余計な押し問答は不要だと告げている。

やはり、彼は聡明な男だ。

「その上で聞くぞ。今この場で俺と戦うつもりはあるか？」

——背筋が凍りつくような、殺気。

裏切られたことへの憤りか。

それとも魔物と相対すれば、相手が誰であつても、必ず向ける敵意なのか。

「もつ、もちろんだ。私も……覚悟の上で、ここにいます」

「……そうか」

彼は小さく呟くと、アイリスをそつと地面に寝かせ、聖剣を携えた腰元に手を添える。

「——魂の色が、見える」

ロモディンを倒したのであろうタイガは、奴から獲得した指輪を眺めながら……いや、すぐさま私に視線を移し、鋭い眼光で睨みつけてきた。

喉が鳴る。

緊張と恐怖で、胃の奥底が痛み始める。

今この瞬間まで、彼と敵対するというこの本当の意味を、私は理解できていなかったらしい。

心臓の鼓動はもはや爆発してしまうのではないかと錯覚するほどの速さを刻んでいく。

私は、ここから、生きて帰れるのだろうか。

「シャル。やはりデカいな、お前の乳は」

「——っ!？」

タイガは私を見透かしている。

魂の色を通して、心の中を覗いている。

確かに、そうだ。

否定はできない。

私の中で父は、とても——計り知れないほど大きな存在だ。

しかし、違うのだ。

父のために、という思いもあるが、私はあくまで自分の意志でここに立っている。

「ち……父は、関係ないだろう。私は元々きみとは相容れない存在だったんだ。だから

――」

「違うな、間違っているぞ。シャル」

彼は腰の聖剣を抜かない。

何を思ったのか、一步、また一步と、武器を持たないまま私の方へ歩み寄ってくる。

「大いに関係がある。お前のクソデカな乳は、どうやら俺を本気で怒らせたらしい」

「だっ、だから父は関係ないと言っているだろう！」

私は魔物に育てられた。

魔王が支配する区域こそが故郷だ。

元々の種族が人間というだけで、私は身も心も魔物なのだ。

確かに父は厳しかった。

生きたければ従えと、死にたくなければ闘えと、幼い頃から暴力と血の臭いに囲まれて育ってきたが、決して闘うことしか知らないわけじゃない。

私は父に支配されているわけじゃない。

魔物として生きてきたから、人間と戦うべきだと自分で判断した。

あれは、別に、そう、戦う理由の一部に過ぎないのだ。
ちがう——違う、はずなんだ。

「お前の乳を許すわけにはいかない。そんな堂々と存在感を見せつけやがって、ふざけるな。必ずこの手で……」

「う、うるさい、うるさいうるさいッ!! 父ではない! おまえの敵は父ではなく、目の前にいる私だろう!?! 闘えタイガッ!」

「——黙れ」

「っ……………」

「見えると言っただろう、魂の色が。俺がこの手で触れ、乳を浄化しない限りお前に未来はないぞ、シャル」

「浄化だと、ふざけるなっ! わたしは! ……わ、わたしは、わたしのっ、意思で……」
魂の色——なるほど合点がいく。

きつと、私の魂の色は混沌としているに違いない。

人間にも、魔物にも染まり切れない半端者、それが私。

だからこそ、タイガは一瞬で見抜いてしまった。

私自身が否定している事実。

見て分かるほどに存在感を放つ父親の影を感じ取り、彼は一つの真実に到達してし

まったのだ。

シャルティアという女は未だ、魔王軍の優秀な戦士に育て上げようとしていたあの父親の、傀儡に過ぎないのだと――

「うっ、あ……」

後ずさった。

心根が揺らぎ、本気でタイガとぶつかり合うための、理由というものを見失ってしまった。

もし、この姿を父が見れば、哄笑をあげるに違いない。

どこまでも中途半端な奴だ、と。

「浄化してやるぞ、シャル。お前の乳を！」

ダメだ、戦えない。

戦場で志や戦うための信念を失ってしまった者には、敗北あるのみだ。

逃げなければならぬ。

体勢を立て直して、心を再び鬼にしなければ、今この場で負けて、二度と立ち上がれなくなってしまう。

だというのに、脚が動いてくれない。

ああ、父上。

私はどうすれば――

◇

もう少しだった。

俺の夢が、叶う瞬間だった。

比喩抜きに、あと一步でアイリスのふざけたクソデカなロリ巨乳を、この手で掴めるところだった。

翔太郎と考案した、不意に胸を揉んでもシリアス顔すれば深読みされて許される説が、今まさに立証される寸前だったのだ。

魂の色だとか適当なことをぬかして、意外と思うところがあつたのかアイリスが驚いた顔で固まったので、とりあえず様子見で一旦ひと揉みイける――はずだったのに。

許さんぞ、シャルティア。

このくつ殺デカパイ生真面目シヨタコン爆乳聖騎士デカ乳女め。

もはや遠慮なしに、お前の乳を揉んで揉んで揉みしだくことでしか、俺の怒りは治まらない。

あつ、なに後ずさってんだおまえおっぱいコラ！

逃がすか!!!!!!

「——いけませんっ、タイガ様!!」

後ろから光の鎖が飛んできて、俺の手足に巻き付いてきた。

十中八九アイリスの拘束魔法だろうが、こんなものでは止まらない。

「ううっ……!! シャル様、お逃げください……ッ!」

「あ、アイリス、どうして……」

「タイガ様は頭に血が上られています! とにかく、今は逃げて——」

うおおおおおおお離せ!!!

あの爆乳揉んで泣かしてやる、くっころ騎士がア!!!!

「ち、違う……私は、きみたちを攻撃したんだ。なのに、なんで……」

「それは——……で、でもっ、わたしたち勇者パーティは、唯一無二の共同体であるハズです! まだ、話し合いだっしてしてない! だから、どうか今はお逃げください!」

あつ! なんかエレナも来た! 邪魔すんなよお前!!

「ちよっ、何なのよこの状況……っ!」

「エレナさん、鎮静睡眠魔法をタイガ様に! シャル様を一旦この場から離脱させなければなりません!」

「え、ええ……!? ……あー、もう、とりあえず了解だけど! ——シャルっ! あんた、

後でちゃんと連絡しなさいよ！」

ああああああアアアアッッッ!!!

よくも、よくも俺のおっぱいチャンスを一——グウ……。